

「見ない夢はかなわない。口で10回言ったらかなう」とマリールイズは言う。

東アフリカの小国・ルワンダ出身の女性。約100日間で100万人が犠牲になったとも言われる1994年のルワンダ大虐殺を生き延びた数奇な運命は筆舌に尽くしがたい。

彼女は難民でありながらAMD Aの支援活動に携わった。現在は「ルワンダの教育を考える会」を日本で立ち上げ、母国の教育の必要性を訴える講演会を全国各地で行っている。

「20年前、ルワンダで子どもたちに『大きくなったら何になりたい?』と夢を聞いたら、1人の子どもが『大きくなれるの?』と。悪いことを聞いてしまったと後悔した。それでね、私、子どもたちにいつか絶対に夢を語らせる場をつくりたいと心に誓ったの」。2001年に完成した小学校設立のきっかけをこう語ってくれた。

小学校では280人の児童が学んでいる。将来は医師になりたい

AMD A理事 難波 妙

一日一題

主よ、人の望みの喜びよ

と、夢を語る児童もいる。彼女は、夢がかなうと必ず神様と支援者に深く感謝するという。

さらなる夢は、貧困地区の子どもを救うこと。劣悪な衛生環境下で、爪の間にスナノミが寄生している子どもたちに心がつぶれそうになったと語る。スナノミは皮膚内で炎症を起こし、悪化すると切断に至ることもある。

他にも、こうした子どもたちと親の健康に対する意識を高めること。「ルワンダの奇跡」と言われる発展の裏に潜む貧困、薬物、妊娠などの問題を抱えた子どもたちを救うこと。

マリールイズの夢を諦めない姿は信仰とともにある。それはバツハの「主よ、人の望みの喜びよ」の旋律のように静かに彼女の心の奥深くで力強く流れている。神様からのチャンスを生かし「見過ごせば何も変わらない」と多くの人に夢を語り、多くの子どもを夢をかなえ、今日も母国の現実に立ち向かう。